

●ふらっしゅ●ばっく● フェリーニの 女千人風呂(女の都) 淀川 長治(映画評論家)

イタリア映画はあぶら手で人間を撫でまわし抱きしめる。

五十三才で少年に惨殺されたピエル・パオロ・パゾリニは男色詩人。

ことし六十一才のフェデリコ・フェリーニは女色詩人。六十九才で生涯を閉じたルキノ・ヴィスコンティはホモ詩人。

そのフェリーニの「女の都」(一九八〇)二時間十九



女を見ると目じりが下るスナボラツ(マルチェロ・マストロヤンニ)

分が、ついに日本公開。

「甘い生活」「魂のジュリエッタ」「8½」「サテリコン」「フェリーニのローマ」「フェリーニのアマルコルド」「カサノバ」すべて肉体の蓄(つぼみ)、肉体の開花、肉体の枯死。色(いろ)を描いてフェリーニは映画のピカソ。

かくて「女の都」は目もくらむ女・女・女・女・女・女・女……その数……二六六三人。

×

女を見ると目じりが下るスナボラツ(マルチェロ・マストロヤンニ)が列車の中で一人の女の胸を見て足を見て胸のくぼみを見て足からその上の女のトンネルへ想像の目を走らせるうち女の都につれこまれる。

×

右も女、左も女、前も女、うしろも女、女が女と接吻し、女が女と抱き合い、その女、この女、あちらの女、その顔、顔、顔が……スナボラツのありとあらゆる部分を目でなめ廻す。さすがの女色の代表選手もインポ恐怖にさいなまれ逃れ逃れたその行き先きは。

×

ここは目を見る豪邸。いましもその御主人カツツォーネ(巨根)博士が一人目の結婚祝賀のパーティー。一万本のローソクが巨大なるウエディング・ケーキに輝き、とくいの博士がこの場に逃げこんだスナボラツを案内したその部屋たるや数百人の女の顔写真。その写真のカラ

「鮮やかな女たちの顔が『おいで、おいで、あそばない』のみだら万点の表情。これすべて巨根博士のスナボラツへのおすすめプレゼンツ。」

この色ガキ博士……その果てにいたり、さしものアレもちからつきたか……涙ながらに女性たちへの別れの歌をうたいつつ生命を閉じた。

かくて、とり残された女たちはスナボラツを博士の身がわりに。彼はおのき震えベッドの下にくぐる。そのベッドの下は、はるかにつづくトンネルとなりそのトンネルの向うは、輝く目もくらむイルミネーションの一大かんらん場。

かく書き綴ったところで読者たちにはさぞやチンチンブンブンカンカンであろう。

まさにさよう。フェリーニの「女の都」こそは女の千人風呂、万人風呂。恥ずかしくて目のやり場に困るばかりと申せば、その道のスキモノはさぞやボルノチックとニヤリズムであろうが、そこがフェリーニ、これ全巻ま

さに……真夜中の女の虹。さすればこれ裸女たちが手を組む女一〇〇人のメリー・ゴラウンドかともその筋のつうは想像されるであろうが、さに非ず。ただの裸女などという三流ボルノはフェリーニの描くところに非ず。すべての女性は、それぞれのニュー・ファッション、それぞれのニュー・スタイルの衣服をまとい、しかもその衣服、そのポーズをとおしてのエロリズムの洪水。

ややこしい映画が来たんやなあ。そんなケツタイな映画、見とうないわ。第一ハダカやないなんてガツカリ。というごとき最底の貧しさにあまんずるやかにはこの女色芸術は猫にコバン。

「84」は芸術を生むため女色を必要とした映画監督のものがき。「魂のジュリエッタ」は夫に捨てられんとする妻のあせり。「アマルコルド」は童貞をもてあますイロガキ少年。「カサノバ」は女を食べすぎた老いの果ての枯れすすき。そしてここにフェリーニはそれらのすべての作品への女の復讐を描いての「女の都」。

フェリーニ美術は女数千人のスケートリンクに。かくてその流動美。ベッドの下のトンネルをくぐるや華やかに現われたるは一大イルミネーションの夢幻美術。

アメリカにデイズニイあるごとくイタリアにフェリーニがある。みどりは赤に、赤はむらさきに、むらさきは虹に、それらの女、女、女、女の虹のかけ橋が、とけて流れて、花火の散るごとく消え去るまでのこの幻覚。

数百人の女の顔がスナボラツに「おいで、おいで、あそばない」と誘いかける。

映画とはまたまさにこれでありますぞ。さよう申したいフェリーニのこの映画芸術。一見二見三見のおすすめ。



てつ かく やん ぶ
脳散歩

〔最終回〕

差別教育

細川 董 ただす
 哲学者・文とえ

足の悪いといいたい自分の子供をつかまえて、特にオリンピック選手にしようなどとは、親は普通思わないはずだ。

「そんなむごいことを！」と誰でも子供に同情するはずだ。

身体障害の場合は、外から見てはつきりしているが、頭の中の障害となると外から分らないだけ問題は難儀である。脳内の働きが、X線のようなものですぐ分る時代が来れば簡単だが、今日のようにどこに欠陥があるか判定しかねるから、脳の一部、例えば、数学、言語、音楽といった夫々をつかさどる脳神経細胞の脈絡に鈍る者をつかまえて、やれ、数学に強くなれ！国語が弱いぞ！楽譜が弱いぞ！とオリンピック強化合宿なみに大学受験目標にしごきかけののだからたまったものではない！脳細胞の数が、誰でも同じだからと、一把ひとからげにやられたのでは落ちこぼれが出るのは当然前だ！

プラトンが、人間を欠陥車と見た話は前にもしたが、運動神経が強い弱い、と平気でいうくせに数学神経や音楽神経の強弱となると、教師達は口をとぎして平等をとねえるのだから、たまったものではない。

脳細胞の数よりも、脳細胞と脳細胞をつなぐ神経の強

弱さ、通りのよさ、が問題なのだ。

運動神経に関する限り、大変な差別を日本の教師は私にやってくれたと、今でもうらんでいいる。

どうしても皆と一緒に合せられないからと、甲子園球場での体育祭への参加をことわられた。

「君！たのむから、明日は学校で自習していてくれ給え」と。

鉄棒で逆上りが出来ない者達は、いつまでも、鉄棒の向う側に留まらされるといった具合の、体育の時間の差別待遇はざらだった。

私は、体育の時間をのろうようになった。今でいう、おちこぼれだ。

その分だけ勉強したから、学業の方では落ちこぼれなかったが、一般的にいつて私の受けた限りの日本の教育は差別そのものだったとしか、思い出せない。

すなわち、私の受けた日本の教育とは、差別することだった、と。

算数の点が悪い時などクラス全員の父兄を学校へ呼んで、100点をとった子供の答案を中学の教師が一人一人父兄に見せるのだ。そして、数学をつかさどる脳障害の遺伝的欠陥を如実に示す訳である。



細川董・ほそかわただす
 京都大学哲学科卒、元大阪樟蔭女子大学教授、F M大阪「夜の美術散歩」DJ、来春3月末に、大阪三越にて「花と人形展」を開催。

△註▽語は哲。字体はすべて高田竹山監修「五体字類」による。



クラスメイトは朝礼の間中、自分のクラスの級長の顔をうつろに眺めて過すのだ。何というつめたさ。何というむなしさ。何という差別。旧制高校では誰の試験の結果も常にくラスの全員に知らされた。

正に、教育とは差別なり、とこれでも思わない方がどうかしているのではないか？

これは主として戦前の話だが、今日も教育の実態はあまり変わっていないらしい。本来自分の子供を守るべき母親が自分のことを棚上げして、差別の鬼と化し、子供は教師と母親との谷間で恐怖におののき苦悩しているらしい。この関係を冷静に見られる父親の存在が、今日の差別教育を救う唯一の救いだ。父親まで、差別教育に加担するようでは万事休すだ。ところが今日の家庭では、母親の権力が強いからやっかいだ。おちこぼれ呼ばわりされる子供が出るばかり。

戦争に敗れて、国力が低下したのに、義務教育だけが小学校から中学へと勝ったアメリカなみに引き上げられたのだからたまったものではない。差別する側の質の低下もひどいものだ。

差別されなければならないような者が、差別されるに値しない者まで義務教育の名において、差別しようというのだから無茶苦茶である。

エレクトロニクスばかり進んで、ロボットを作ってドルをかせぐような国には今に人間は住まなくなってしまうであらう。

私の通った中学では、学年の総数200人ぐらいだったが、一番から五十番までをA組と呼び、五十一番から百番までをB組と呼んで、以下C、D組と組分けして、一年間の成績順に朝礼時にA組B組C組D組という風に並ばせ、その各組の先頭に級長を立たせるのである。

B組の級長は、A組のビリよりまだ一番順位が下ということを、毎日の朝礼中身にしみこませるのである。

一品からコースまで本場の味を
お手頃なご予算でお楽しみいただけます



高級料理から大衆料理まで、食通の中国人も、これは美味いとお太鼓判を押すほど、味・品数ともに定評があります。料理長の李昌玲さんは、テレビの料理番組に出演したり、オリエンタルホテルで中国料理の講師も務めています。

ただ今、栄和飯店ではクリスマス・忘年会・新年会などのパーティの予約を承っています。
お1人様3,000円(税・サ別)から

＜今月のおすすめメニュー＞

四宝素菜(白菜と野菜の料理) 鳥巢三鮮(イカ・エビ・貝柱の料理)
清燉冬菇(しいたけのスープ) 生蠔豆腐(牡蠣と豆腐の煮込み)

なお当店は都市計画のため来年早々には仮店舗に移り、ご迷惑をおかけいたします。つきましてはそれまでの間、日頃のご愛顧にお応えをしてサービス期間といたします。

中国料理

栄和飯店

神戸市中央区栄町通 1-2-28 大丸西口中華街
TEL (078) 392-1982
11:00AM~8:30PM 火曜休み

この一年に乾杯



ファミリーに最適——三宮地下街店

ピアノの生演奏の調べ。キャンドルを囲んでの楽しい語らい。レンガ造りの壁に心がやすらぎます。ピザハウスのイタリコもよろしく。

ビール党のオアシス——神戸元町店

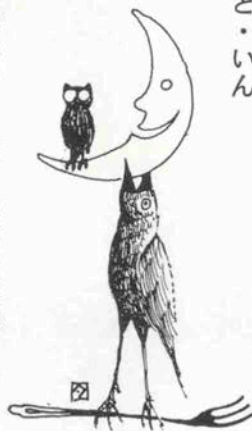
1階はビヤホール、2階は炉端焼、3階はジギスカンとそれぞれ趣向をこらしています。お好みに合わせて、気の合う仲間とお楽しみください。

夜の会合・宴会など小グループでのパーティにご利用ください。

ニュー・トーキョー

三宮地下街店(391)5069 神戸元町店(391)4511

ぴっと・いん



★洋菓子のアンテナノールが
大阪にお目見え

洋菓子の「アンテナノール」が、このほど大阪・阪神百貨店地下1階洋菓子売場にオープンをした。デパート進出はこれが初めてである



アンテナノールのケーキ

売り場は、阪神電車乗り場のすぐ近くで、人通りが多いだけに、ディスプレイや商品構成も人目を引くように工夫され、ケーキはショートケーキを主に23種類ほかにチョコレートなどもあり、シャレたパッケージも用意されている。

アンテナノール

△本店▽神戸市中央区中山手通1-22-13 (ヒルサイドテラス1F)

△阪神店▽大阪市北区梅田1-13-1

★フランスの田舎料理の味を手頃な価格で堪能
7年前、友達とバりに旅行した際味わった郊外の田舎料理の店の味と雰囲気忘れられずにこの歳になって初めて店を開きましたとおっしゃる御主人の言葉がそのまま店の雰囲気を与えているのが「フランス田舎料理キャノン」である。日



落ち着いた雰囲気のカノン

本では高級料理ととられがちなフランス料理を落ち着いた気分であく食べて欲しいと造られた店内は白を基調に家庭的な色合いが強く肩が凝らないフランス料理を質量ともに充分に楽しむことができる。

メニュー／南瓜スープ500円、舌

びらめベルモット蒸し2000円
中央区北長狭通1-11-85
キングストンビル3F 電話331-4670

★本場イタリアの味を
六甲のあかづきんで

国鉄六甲道駅南西、六甲道商店街にあるピッツェリア「あかづきん」が10月23日、開店1周年を迎えた。



気さくで明るい広島さん

かつてニットデザイナーとして活躍していた広島由美子さんがオーナー兼料理人で、一人できりもりしている。ファッションの勉強のためにミラノに留学したが、もともとと食べることが好きなことも手伝ってイタリア料理の学校へ転学して何と調理師の資格まで取ってしまった。

生地もソースも手づくりの自慢のピッツァは種類も豊富、大きさも4種類あって自由に選べるのが嬉しい。灘区琵琶町1丁目電話821-1149
1営業時間AM9:30-PM9:00
ピッツァ400円、ラザーニ600円、タン550円、タザーニ600円
△町正11月の喫茶「リナコン」の本山駅山側とあるのは住吉駅山側のまちがいでした。

●神戸うまいもん
とドリンキング

スパイスレストラン
ぶはら

中央区三宮町2の3の9
タキビル2F
電話331-1734

ダイエー・リビンギビルの西、阪神相互銀行の西隣りに黒地に白のひらかなの看板が目をはひく。狭い階段をのぼって2階へ行くと、別世界。店内に漂うスパイスの香り。神秘的な中近東の音楽。



店長の松山道夫さん

今年10月1日に中山手から移った。父と息子でやっている小さな店だが、「大きな店にする気はない。ただ良い仕事をした」という。スパイスは五、六〇種類もあるそうだが、種々のスパイスをつかったカレーとシシカバブは絶品。店内に置かれている年代物の薬味籠も一見の価値がある。

営業時間11:30AM-12PM
5PM-8PM 日曜休ラン
チノカレー千円・コース一六〇〇円・ディナーシシカバブ一八〇〇円・コース一七八〇円

SPECIAL MESSAGE

神戸百店会だより



★風月堂が大阪大丸で
「源氏の由可理展」

村山リウ先生を月一回、神戸に招いて「源氏物語を聞く会」が昭和42年に発足して足掛け15年、この9月に桐壺から夢浮橋まで源氏物語54帖が完講した。



繊細な和菓子に感心

その月例会に出されたお茶菓子は、話の内容、雰囲気、味などで表現するよう神戸風月堂の吉川冬季子相談役が考案、和菓子部が製作したもの。

完講を記念し、10月8日(13日まで)大阪大丸7Fで創作された200種類を超える

作品の中から選ばれた70点を展示、実演販売した。

一つ一つの作品につけられた説明と、和菓子の素晴らしさに、会場を訪れた人たちは、感嘆の声をあげていた。なお、茶寮も設けられ、「源氏の由可理」の趣きが味わえた。

★'81ビュティフル
モーニングブレゼント

UCC上島珈琲では、'81ビュティフルモーニングブレゼントを実施中。A賞として毎週1,000名様(期間中13,000名様)にユニークなエッグスタンド付のモーニング



A賞のモーニングカップ&ソーサー

カップ&ソーサー1客、B賞として毎週2,000名様(期間中26,000名様)にUCCビュティフルモーニングブレゼント(レギュラーコーヒー100g)を抽選のうえ差しあげます。

応募方法/UCCレギュラーコーヒー製品に貼ってある、UCC100%PUREシールを応募ハガキ、又は官製ハガキの裏面に貼ってお送り下さい。ハガキ1枚を1口とし、お1人様何口でも応募できます。郵便番号、住所、氏名、年令、職業をご記入の上、〒650-91神戸中央郵便局私書箱1200号UCC上島珈琲本社'81ビュティフルモーニングブレゼント係までお送り下さい。
実施期間/昭和56年12月26日(土)まで(当日消印有効)
発表/毎週厳正な抽選を行い、ブレゼントの発送をもって発表にかせさせていただきます。

★'81秋ジュエリーデザイン
はナチュラルが主流

恒例ミキモトの「'81秋の特別展示会」が10月28、29日と大阪ロイヤルホテル桐の間で、30、31日と梅田店で開催された。

今年のテーマは「輝・夢・詩」。

ここ数年、ジュエリー・デザインは抽象的なものが主流を占め、「クールでハード」から「ホットでソフト」なものへと変化している。また、日本人のジュエリーに対する感覚も、個人がそれぞれ自分に合ったレベルで楽しむといったもの

● ショップトビックス

★つるや衣業店では、12月13日(日)に神戸ポートピアホテルB1で「新作結婚衣装展示会」を開催いたします。入場随時、案内状をご入用の方はお申し出下さい。神戸ポートピアホテル衣裳室 078(302) 10551

★オリエンタルホテルB1のイタリアンレストラン「コモ」では、オープンして6ヶ月を迎え、感謝をこめてお徳なメニューを用意しています。名づけて「モセット感謝券」¥580。お飲みもの(生ビール、グラスワイン、ウィスキー、ジュース)から一品と料理(ミニピッツァ、一口コロッケ、イカポテリ串焼ワイン味、牛肉と野菜のソテー)しょうが風味、フライドチキン)から一品お選び下さい。期間は12月24日まで。2PM19PM 問い合せ/33118111

★中川衣業店では、12月6日(日)オリエンタルホテルにて、「結婚衣装展示会」を開きます。どうぞお立ち寄り下さい。

★北野坂のタニジビル1Fの神戸ダイヤモンドギャラリーで、10月27日(11月1日まで)「岩瀬重哉作陶展」が開かれました。美術陶磁器の漢洲堂の主催によるもので、定評ある塩釉を主にした、新作を展示

★モロゾフの「'81 WINTER GIFT」では、白いチークズキーを配達用に用意しています。レATHERズキー・フルーツ・スー・ペイナ・ブレン・ストロベリー・オレンジ・レン)の詰め合せ。1,200円(4個人)110,000円(34個人)まで揃っています。

★国際会館の「ミキモト」では、12月25日(金)まで「ミキモトクリスマスコレクション」を開催しています。便利なローンでのご用命も承っておりますのでお気軽にご利用下さい。

New Face



イタリアン レストラン



になってきている。こういう傾向を踏まえ、今回の商品デザインのテーマは「半具象」においたもの。
約900点の新商品と変型サファイアペンダント29パターンなどが展示され、女性客を魅了していた。
★バイ&コーヒージュップ
マイケル・ジェイズ
交通センタービル前の横断歩道を南へ渡ってすぐの所に、バイショップ「マイケル・ジェイズ」がオープンした。壁、テーブル、椅子が真白という、とてもお洒落で可愛い雰囲気。

5種類の自家製バイ(店の2Fで焼いている)とマイルドエスプレッソコーヒーがおすすめ品。一度味わ



ウィンドウには大きなバイ

えば必ず夢中になるほどオイシイ。経営は河南堂事業部。アメリカで遊学してきたというハンサムな邱光博部長のアイデアで始められ、近々お持ち帰りも出来るようになる。

■神戸市中央区三宮町1-7-22
電話391-1925 水曜休 営業時間AM11~PM9
コーヒ300円、アップル・チェリー・ブルーベリー・ラズベリー・ブラックベリーバイ各350円、バイ&コーヒー又は紅茶セツト500円。

★20名の愛読者が参加して

「コモ」で試食会

本誌の愛読者を招待しての「新メニュー試食会」が10月11日(日)午後1時30分からオリエンタルホテルB1イタリアンレストラン・コモで開かれた。

抽選で当った20名の愛読者の方はほとんどが女性。

試食メニューは、スパゲティがあまりといかのトマトソース仕上げ、明太子とういのバター仕上げ、仔牛肉がマルサラ酒煮とハム巻きローマ風、そしてお好みピッツア。

参加されたグルメの皆さんは、いろいろな味が楽しめて、黙々と賞味した後、「おいしかった」と満足。初めての試みだったが、今後継続したいとのこと。

新製品コーナー



元町1番街の太田ベッ甲店のニューデザインのブローチをご紹介します。ベッ甲ならではの光沢とつやを生かし、花を型どった大きなブローチは、パーティーなどで胸元を華やかに演出してくれます。
どちらも15,000円

★元町画廊の佐藤廉さん、ともしびの賞を受賞



郷土文化の向上のために地道な活動を続ける人に与えられる第7回ともしびの賞を佐藤さんが受賞。兵庫県下の美術作家の発掘、育成に力を尽くしたということで、新谷英夫、永田耕衣、中西勝各氏の推選を受けた佐藤さんは「まだ実感がわいてこない」と照れた表情。

ポケット ジャーナル

★県文化賞など各界の 功労者に決定

今年度の県文化賞、国際文化賞、科学賞、社会賞が決定し、10月27日に明石商工会議所で授賞式が行なわれた。文化賞は郷土史家の荒尾親成、歌人の木村栄次、書道家の小山素洞、作家の直井潔、郷土史家の渡辺久雄、兵庫県洋舞家協会 国



上段：左より荒尾親成、木村栄次、小山素洞、直井潔、渡辺久雄、ウエノ・アントニオ・ヨシオ、下段：浅利明、泉久司、幸田盛堂、橋詰源蔵、今井鎮雄、服部正



能空間をめざす、メンバーズクラブである。



オープンした KOBE 21 C は、8階は、レストラン、パティオ、会議室などのあるコミ

際文化賞はブラジル連邦共和国下院議員で兵庫県とパナ州の交流に貢献したウエノ・アントニオ・ヨシオ、科学賞は神戸製鋼所の浅利明、姫路工大教授の泉久司、大阪機工猪名川製造所の幸田盛堂、県立工業試験所の橋詰源蔵、社会賞には神戸 YMC A 総主事の今井鎮雄、大阪社会事業短大校長の服部正、(財)神戸新聞厚生事業団がそれぞれ受賞。文化科学の各賞には芸術院会員木下繁さん製作のブロンズ像、国際文化賞には小林美春さん製作の古鏡、社会賞には金一封が贈られた。

★スポーツと文化の拠点
KOBE 21 C オープン
10月21日、「サンバル」(中央区役所北側) 8、10階に「KOBE 21 C」が華やかにオープンした。

「KOBE 21 C」は、スポーツ施設とコミュニケーション施設を集約した複合機

ユニケーションのフロア。9階は、今話題のラケットボールの楽しめるコート、アスレチックジムナジウムなど。10階には、25m4コースのスイミングプールがある。21世紀をクリエイトイブに生きるためのスポーツと文化の拠点の誕生だ。

中央区雲井通5丁目3サンバル
(078) 29110210

★末次攝子の「眼」を着に
する会、盛大に開かれる
新聞、テレビなどで活躍する一方、よみうり千里文化サロンを創設、大阪府参事として行政の分野でも多彩な活動をしている末次攝子さん。その末次さんが創元社から「おんなの眼」と題する初の随想集を刊行したのを記念して、10月16日に大阪のロイヤルホテルで「末次攝子の「眼」を着にする会」が開かれた。田カモカのおちちゃん、田辺聖子ご夫妻の司会で、岸

誕生日
ありがとう
運動



意義あるお誕生会を!!

みなさん、子どもの誕生会をどのようにされていますか。本号では、こんな有意義な誕生会を迎えましたという便りの紹介です。(前略) さて、今年次男が七才の誕生日を迎えました。そして、念願の「誕生日ありがとう運動」のお仲間になっていただくことにしました。

お誕生会にきていただくお友達からのプレゼントは廃止して、その代わりに、お友達にも、誕生日がありがとう運動に百円ずつ献金していただくことにしました。

この事は、本人も納得し、お友達のおかあさん方が、とても喜んでくださいました。年々ではなかりがちな誕生会に疑問をもっていた。そういう主旨でやっていたんだ。そういふ主旨でやっていたんだ。大賛成。プレゼントをいただくのは嬉しいが、その場限りの品物になりやすい。今度からはわたしもそうしたい。そして、今後は、自分も誕生日を機会に障害児の問題に目をむけたい。などの反響をいただき、わたしもお話した甲斐があり、とても心強く嬉しく思いました。

お誕生会当日は、わたしの手作りを料理、次々とたがらせる彼等を見ながら、しみにみえがたき思いました。
ここに子ども達の献金を送ります。(以下略)

お誕生会は、いかがですか。
誕生会がありがとう運動本部

61神戸市中央区御幸通り一六
神戸国際会館一階の郵便局の隣
電話二五一八六一 内線三一六

昌府知事、千宗室、藤本義一、寛久美子、竹村健一さんらが次々にお祝いを述べた。紫のロングドレスに身を包んだ末次さん、この日も大きな眼を輝やかせて祝福を受けていた。

四六判・256頁・1500円

★福元ファミリアがテレビに登場



福元早夫さん
「新日本文学」や「文学学校」誌上で活発な創作活動を展開している福元早夫さん（西宮市在住）一家が12月4日午後11時40分からの毎日放送テレビ「映像80」に登場することになった。

三交替制の労働者として川崎製鉄に勤めるかたわら小説を書き続ける福元さん、最近詩集「生える」を出版した奥さんの登美子さん、そして二男一女の一家の素顔がドキュメンタリーとしてどうまとめられるか。大いに期待したいところだ。

★「ひょうごの仕事うた」

伝承の世界を再現

労働と歌とは切っても切れないもの。厳しい労働に耐えながら、ある時は素早く力強く歌いつがれてきたのが仕事歌だ。私たちの郷土にもそんな歌声の数々が残っている。田植え歌、酒



仕事歌の数々が再現された「ひょうごの仕事うた」の行程、刊行された。

編著者の河野年彦さん（県立東灘高校事務長）を囲んで出版記念会が10月23日に楠公会館で開かれたが当日は神戸中央合唱団の有志、マリンバ演奏家の宮本けい子さんなどにより仕事歌の生演奏も行なわれた。「ひょうごの仕事うた」、1000円 神戸新聞出版センター

★大サハラの人、芸術、自然を語る集い

神戸輸入促進フォーラム（田嶋克己理事長）が第13回目の平和講座として10月21日にニューポートホテル舞子の間で「大サハラの人、芸術、自然」と題する講演会を開催した。講師はアルカイック美術の権威、木村重信さん（大阪大学教授）で、大砂漠にジープを駆って調査した壁画や文化遺産がスライ

ドとともに紹介され、厳しい自然の中で暮らしている

人々を見ると、この人たちの幸福はどこにあるのだろうと当初考えたが、それぞれの場合にふさわしい生活様式があり、幸福の多義性を感じる」と結ばれた。



講演する木村重信さん

来春には日本アフリカアラブ文化技術交流協会が木村教授や「一粒の麦」の著者、小林信次郎さん（大阪工業大学教授）などを中心に発足する予定で、今後の交流の深化が期待される。

★生菓子経営研究会がチャリティセール

和菓子業界の若手50名で組織している神戸市生菓子経営研究会（会長喜一）が10月17、18の両日、三宮神社において「和菓子のひろば」と銘うって、チャリティセールを行なった。

同研究会は今年で創立20周年。お

りから国際障害者年

害者年というこ

ことで和菓子

を見な



あたらしいふれあい

家庭看護促進協会編



不遇な子どもたちに里親の世話をしてきたワーカーや里親さんたちの文集。「親と子の絆をもとめて」の副題に運動を進めている人たちの折りが聞かえてくるようだ。養護児童と呼ばれる子どもたちの哀しみと痛み、血のつながらぬ大人と子どもが真の親子として結びつくまでのドラマなどが綴られ、里親運動への理解の目を開かれる好者。多くの人に読まれてほしい（1300円・晃洋書房）

島辭記—南島詩篇

作井 満詩集



徳之島出身の詩人、ハガキ形式の南島通信を出し続ける作井さんがこの二、三年に発表した詩作をまとめ、第一詩集を刊行。「時代の曲が角になると島が見えてくる」という著者の島Vへの傾倒ぶりは、まさに島に酔うというにふさわしい。視えざる島を幻視しつつヤマトで生きる者のすまじい葛藤に詩空間が躍る。（3000円・沖積舎）

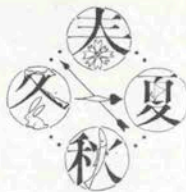
おしてもらおうとPRをかねて行なったものだ。

境内では四季の和菓子の即売、もちつき、お茶席、素人占いなどの多彩な催しがあり、千五百箱用意された和菓子があつというまに売り切れる盛況ぶりであった。売上は同研究会のチャリティ基金20万円と併せて寄付された。

★兵庫駅前であいの学校

地域の「もう一つの学校」をめざして兵庫駅前アルパビルに10月4日オープンしたのが「であいの学校」。

花時計



「幻の商店街」

神戸市の商店街連合会が創立30周年を記念して「30周年史」を編集し上梓した。

この編集を担当した委員長長野敏一さんからその本を直接いただいた。

そして、この「30周年史」の編集の柱に「幻の

めの場として構想され、校長はかつて「週刊ビーナツ」を主宰した津村喬さん。太極拳、野口整体、自然流クッキング、地球を読むインサイダー・フォーラム神戸など心と体をしなやかにするのための講座がいっぱい。

昨今流行の文化教室とは一味ちがう新しいタイプの地域センターに育ちそうだと57519203

★中国針を使った治療で90

多の人の視力が向上
現代でも決定的治療方法が確立されていない仮性近視や白内障の治療を東洋医学の粋といわれる針治療でこない、患者さん達に郎

商店街」という項目があり、光っていた。

幻の商店街とは小野中道商店（現在のそごう百貨店旧館と新館の間を東へ生田川に至る）。有馬道商店街（多聞通6丁目交差点から南相生町まで）。柳原商店街（国鉄柳原ガードから神明神社まで）。そして、西宮内商店街、大仏前商店街、清盛筋商店街、御崎新地の商店街、御崎本通商店街の西宮内から旧省線和田岬線笠松踏切までの一本道による5商店街の8つ



報を与
えてい
るのが
「養生
会東洋
医学綜
合センタ
ー」である。眼の
周りの筋肉の中にある、つ
ぼを針で刺激することによ
って80%〜90%に近い確率
で視力が向上している。9
月に三宮分院が開設され、
好評を得ている。また同セ
ンターでは中国から針治療
の専門家を招いての技術者
養成にも力を入れている。

△お問い合わせ▽養生会三宮視力レク・センター 神戸市中央区磯辺通4-1-18 電話2511-2851

の商店街が戦前、相当繁栄していた商店街にもかかわらず幻のように消えてしまったというのである。ところがその商店街の昭和初期の頃のそれぞれの商店街の復元図が作られ掲載されている。

そして、当時の生活を描き出す挿話がちりばめられて楽しい。面白いのは、淀川長治、西田政治、武田繁太郎さんの生家などが明示されていることだ。が、いずれにしても大変な労作でありこんな歴史物語こそ大切だ（Y）

KOBE POST

★「僕の見た神戸」でおなじみの画家・西村功さんが神戸新聞出版センターより画集を出版。現在、編集途中で1月中旬には発行予定。また、ご息子の西村泰利・洋ご夫妻には2人目の赤ちゃん（女の子）が誕生。おめでとう。

★神戸市建設計画局長をされていた嶋原英夫さんが10月10日に退社され、近く店舗デザイン事務所を開きます。今後の活躍をお祈りいたします。

★兵庫県自然教室「稲尾慶事長」が活動を始めてから10年を迎え記念行事として神戸市青少年会館で10月29日・11月1日を以て「はぐらがつかんだ自然フェスティバル」の展示会と発表会を行いました★橋松重二さんがデューセルドルフから2年ぶりに帰ってきました10月26日・11月7日、大阪府立現代美術センターで立体と写真の個展を開き、しばし鋭気を養って11月末に再び渡欧されました。

★昨年12月に脳梗塞で倒れた郷土作家の山本博繁さんが闘病の甲斐あって10月11日に退院されました。

★家庭養護促進協会では、里親月間行事の一つとして里親運動を進めるための愛の手パズルを10月29日に市立婦人会館で行ないました★アド・ライトの橋本英男さんが10月17日から11月23日までコヒエの原産地を尋ねて世界旅行に

★神戸生まれの映画監督中川信夫さんの新作「生きてゐる小平次」が10月にクラシックイン。完成は3月、封切は4月予定。原作：石橋正次、宮下順子他。ATG+磯田事務所提携作品。

★元神戸大学教育学部教授の岡本重雄さんが10月20日亡くなられました。心からご冥福をお祈りいたします。

酒と料理を提供する人のための経営専門誌

居酒屋

第8号

別冊食堂 定価2400円

●A4変型判270頁(千300)

●独立企画
●酒と料理の研究シリーズ
●居酒屋料理研究へカラーグラビア
●こんなにやく料理!!工夫しだいでバラエティ豊か
●創作居酒屋料理(汁)

和洋 大衆居酒屋の
オリジナル超人気商品

特別企画

急変するマーケットに果敢に対応する注目の業種業態
新店新商法9事例

現代消費者の飲酒動機・飲酒行動を鋭くみすえ、独自の店づくりと経営手法によって客を吸収する居酒屋9店を選び、詳細に分析研究



柴田書店 東京都文京区本郷3-33
☎03(813)6031(代)

豪華さとくつろぎと本物の味



ハイセンスな神戸っ子の憩いのオアシス
気品ある雰囲気なかでおくつろぎください



喫茶館

英国屋

三宮・神戸国際会館浜側

☎(078)251-4562

7:30AM—10:30PM 第3水曜日休み

(姉妹店)

喫茶館 仏蘭西屋

三宮・フラワーロード(市役所前) ☎232-4643

一男一女

桜井利枝
絵 / 辻 司

まち子は此頃自分が少し弱気になり過ぎていたのではないかと思う。和彦が別居して、一人になった時のあの解放感と、ある種の充実感、いったい何処へ消えてしまったのかと、我ながら不思議な気持がするのであった。日本人の平均寿命まで、まだ二十年がたっぷり残されているのである。0才の子が成年に達する、それと同じ年月ではないか。まち子は、はっと吾に帰った。

(駄目だ駄目だ。老化現象に蝕まれたりしては……)

彼女はこの数日、和彦たちとの同居の問題に囚われ過ぎていたことを反省している。そもその原因は悦子がお母さんが淋しいのなら自分たち家族が同居する、と言いつ出したためである。それというのも、まち子が佐久子の愚痴をこぼすのを、悦子が聞き流しかねてのことであるが、まち子の反省は、そこまで行き届いてはいない。

（今から婆さんあつかいされちゃ、かなわない。老化への自衛は、まず自分の若さに自信を持つことだわ）

すぐにも跳ね起きたいような衝動にかられたが、結局夕方になって和彦が顔を見せるまで、まち子は床を離れようとはしなかった。

和彦は心配して、

「五十腰だなんて言っていないで、医者に診てもらえばいいんだよ。明日、佐久子付き合わせるといいよ」とすすめる。

「別にそこまでしてもらわなくても、一人でも行けるわよ」

時が時だけに、まち子の返事はそっけない。和彦はむっとした顔になった。

「ちゃんと言うことを聞かなくや、駄目じゃないか」

どんな場合にも、母親に対して荒い言葉を吐いたことのない和彦である。まち子は啞然となった。佐久子がその場に居ないことが、まだしも彼女に平生を保たせたが、もしそうでなければ、悔しさと惨めさで、彼女の身の内は火のように熱くなったに違いないのである。

まち子は、和彦の目に映っている、自分の老いを感じざるを得ない。鏡にうつる自分の老いを、自分の目では識っているつもりでも、和彦の目を通せばどのように見えるのか、彼女はまるで想像がつかない。幼ない頃「母さんはきれいだね」と言った子が、今はどのような視角を自分に向けているのか。自分で感じている老いよりは、恐らく何十倍かの精密度でとらえているであろう和彦の目を、まち子は強く意識した。それは屈辱的ではあるが、どこやらにマゾめいた甘い痺れをも伴っていた。「ああ、いやだいやだ。年はとりたくないものだわ。わが息子に、こんな偉そうに言われるなんて……」

あとは涙声になって、ふとんの中でぐももっている。

まち子の泣き癖を知っている和彦は、苦り切った視線を彼女の上に落としているが、それとはやや不釣合いな、穏やかな声で慰める。

「どんなことがあっても、母さんの面倒は僕が見るよ。この家を手放すのが不賛成なら、何も無理に売ろうて言ってるんじゃないんだ。だからね、何かあった時にはすぐ僕たちに知らせてよ。佐久子もそれなりの自覚を持ってるんだから……悦子は嫁に行った者だよ。分ってるんだろね、母さん」

何を分れと言ってるのか、まち子には見当がついていない。いつか遅くやって来て泊った晩、まどろみかけた耳で聞いたので、確信はなかったのだが、あの時、

「悦子夫婦に、この家を渡すことはないよ」

と言った和彦の声は、やはり現実のものだったのである。

（何という身勝手な子……）

一度はそう思ったが、どんなことがあっても自分が面倒をみると言われてみれば、まち子はやはり嬉しいのである。

その夜、夕食をすませて三人が茶の間で雑談をしているところへ、ピアノ教師の娘が細くふすまを開けて、遠慮がちにおとずれた。

「お願いがあるんですが」

と言う。まち子は誰も見ていないテレビを切り、愛想よく娘を招き入れた。

「あらたまって、どうなさったの」

まち子にはこやかに尋ねる。

「あのう、本当なら姉がうかがうべきなんです、ちょっと小母さまのお気持を、私に聞いてほしいって言うものですから……姉のお友だちで、アメリカに留学していらっしゃった方なんです、近いうちに英会話の教室を始めたたいとおっしゃってるそうなんです。それで、もしお差支えがなければ、こちらさまでお貸し下さらないでしょうか、と姉が……」

その女性にはアメリカ人のフィアンセがあり、彼は県内の或る予備校で英語を教えながら、日本語と日本文学を勉強しているのだそうである。

「じゃ、その彼氏と二人で教室をやるの」

和彦はこの話に興味をもったようである。

「さあ、そこまでは、私……」

彼はさすがにまち子に気兼ねをして、自分の意見を差控えているが、目には諾意がありありとうかがえる。しかしまち子は慎重であった。

「お話は伺いましたわ。突然のことなので、少し考えさせて下さいって、お姉さんに言っといて下さいな」

「はい、わかりました。そう伝えます」

稽古を済ませた娘は、それからまち子たちの団居のなかに加わった。

まち子にとってそれからの一カ月は、文字通り矢のような速さで過ぎていった。近くの県立病院への通院は、週に一度から二週間に一度で済むようになり、ほとんど全治に近い状態にまで回復していたが、その間に、親戚での二件の葬儀に参列しなければならぬ破目になった。

一人は九十才に近い高齢で、まずは順当といえる死であったが、もう一人の方はまち子よりは少し若い、五代半ばの男性であった。停年を数年先にひかえていたが、総領の息子が大学一年生という、働き手がまだまだ必要な家族を遺しての死であった。

まち子は、夫が六十才の誕生日を前にして急死した日の、混乱と放心の入りに交った自分の心理状態を、その未亡人のうちひしがれた姿の上に、まざまざと再見する思いであった。彼女にくらべれば、まち子の場合には既に悦子を嫁がせた後であったし、和彦も一人前の社会人で、ふりかかってくる生活の重圧は、その人とは比べものにならない軽微なものであった。

まち子はあらためて、自分の幸運を思うのであった。人からよく言われるように「結構すぎる」という形容は、強ち的外れではないのかも知れないと思った。

(みんな、あなたのお陰よ)

こういう場合、まち子は殊勝にも夫の霊前にむかって、

心からなる合掌を捧げるのであった。

英語教室の返事も延び延びになっていたところへ、娘の姉が当の女性を連れて頼みに来たのは、つい二三日前であった。

アメリカ帰りで、国際結婚をしようとしている女とは、いったいどんな人物かと、まち子は多少の危惧を抱いていたのだが、会ってみると彼女の想像とはまるで違って、華奢なからだつきに地味な身なりの、しかしかなりしっかりとした根性の持主とみられる、三十才くらいの女であった。とびきりとまではいかぬまでも、何となく好感の持てる相手だと、まち子はほっとした。

和彦は勿論大賛成である。それなりの収入をまち子が得ることの他に、精神衛生的にも、そのような新しい生き方を目ざす若い女と、母親がつきあって刺激を受けることのメリットを、彼なりに考えてのことであった。

「母さんの願望と生活意識とは、まるでアンバランスなんだから、もっと自分を鍛え直そうという気持ちにならないか駄目だよ」

と彼は言った。確かに、これまでの生活意識を組み立て直さなければならない必要は、まち子自身痛感しているのである。

(でも、これもしんどいことではある……)

しかしそうでなければ、これまでの自分を済し崩しに消耗してゆくだけの、ただの余生にすぎない日々を送ることになりかねない。

(とりあえず、教室を広めようか)

まち子の気持は傾いていった。そして、どうせ広めるからには、もっと他の科目も設け、応接間の他に、今は使っていない隣の六畳の部屋も、フルに活用するだけの講座を組んではどうだろうか考えるようになった。彼女の家は大通りから一筋入った四ツ辻に位置しているので、立地条件も悪くはない。

その時まち子の頭に浮かんだのは、田中涼子のことであった。あれから一度電話が架かっただけで、特に接近

してくる様子もみられないが、もし彼女に花の教室を持つとうという意志があるなら、誰を差し置いても涼子をむかえてやりたいと、まちは子思ふのである。

歳末商戦の開始が年々早くなるせい、十一月の下旬に入ると、何となく気ぜわしい雰囲気が街に流れる。どうせのことならデパートが混まない内にと、まちはいつもより日を繰り上げて買物に出かけることにした。歳暮の品を送らせねばならない、二三の用も兼ねていた。

S銀行での引出しを済ませると、そこから向い側のA銀行へ電話を架けた。涼子と昼食をとりながら、彼女の意向を打診しようと考えていたのである。月末をひかえて忙しいのではないかと思ったが、涼子は快くつき合うという返事である。



待ち合わせた場所に現れた涼子は、行く店を決めないまち子を、メーン通りから少し入った所の、落ち着いた雰囲気のレストランに案内した。

まちは単刀直入に用件をきりだした。涼子は思いがけない話に驚いたようだったが、峻巡することなく、まち子の厚意を受け入れる意志を示した。

「銀行ではどの店にも、古くから大きな流派の先生が入っておられますので、私などの割り込む余地はないんです。実家の方も弟の家族が同居してまして、広い部屋が空いていせんので、もっと修業を積んで家元の代禱古をやらせてもらえるようになるまで、教えることは諦めていたのですが……ほんとうに夢のようなお話で、ありがとうございます」

涼子の喜びようは、まち子にも予想以上のことであった。涙もろいまち子は、すぐに胸が熱くなるのである。

「じゃあ、来年四月からということでしょうか。それまでにいろいろ相談して、準備をすればいいんだから」

「はい。どうぞよろしく願います」

涼子は深く頭を下げた。

彼女には銀行の仕事があるので、日曜日の午後から夜にかけての稽古が望ましいようだが、平日の夜だけでもいいと、遠慮がちに希望をのべた。まちは、涼子の最初の弟子になることを約束した。

その翌日、まちは英語教室を承諾する旨を先方へ伝えた。

いちど決心がつくと、まち子の頭の中にはいろいろなプランが浮かんできたが、和彦から企画倒れになることを注意されているので、当分は欲張らずに、ピアノと英会話と華道の三科目でやってゆくことにした。

しかし、一般に華道と茶道は併設されていることが多いので、誰か適当な先生があればと考えたが、夫の古い友人である田塾一穂の妻が、家で茶道を教えていたことを思い出した。

いきなりそういう話をもって訪問するのも気がひける

ので、まちは電話でそれとなく、先方の意欲の程を探ってみることにした。

電話に出てきたのは主人の方であった。若い頃から俳句を嗜み、今はその派で名の知られた俳人である彼は、普通の挨拶の会話にも、自若とした声のひびきをたくわえていた。

「あなたには、いちどお目にかかりたいと思いながら、ついご無沙汰をしています。いかがですか。もうお慣れになりましたか」

先年夫の三回忌に来てもらった折、故人に対するさりげない心情を詠んでくれたことを、まちは心の中で思い返していた。

「はい、どうにか……でも一人で暮らしてみますと、それなりに自由で、なかなか捨てたもんじゃございませんわよ」

まちは訳もなく、そんな強がりを言ってみたりする。田基は正直に聞きとめている。

「そうですか。それなら安心です」

「あのう、実は奥さんに一寸おうかがいしたいことがあって、お電話を差上げたんですが……奥さんはおいででしようか……」

躊躇いがちに尋ねるまち子の耳に、意外な応えがかえってきた。

「家内は、この九月に亡くなりました。お報らせすべくかとも思ったのですが、ごく内輪で葬式を済ませることにしまして、失礼をした次第です」

「まあ、そうです」

まちは驚きのあまり、それまでの意気込みを一度に萎ませてしまった。しかし先方は冷静に用件の主旨を話し、それなら家内の友人に立派な先生があるので、紹介くらいならさせてもらうと、協力的な返事をしてくれた。それから一週間ばかり過ぎて、まち子もそろそろ暮れの雑用にとりかかろうとしていた日の朝、田基から電話が架かり、こういうことは結局、双方の信頼関係が成立し

なければならぬ事なので、一度気楽な気持ちで会ってみてはどうかと言うのである。まち子に否やはなかった。「では、どこか中間点でお会いすることにしませうか。場所はあなたの方で決めていただいたら、案内して行きますから」

と言う彼の言葉に、まちは先日涼子に連れて行ってもらったレストランの名をあげた。

「それじゃ、明日の夕方五時にお待ちしております。どうぞよろしくお願いいたします」

まちは見えない相手に、何度も頭を下げた。田基の控え目な厚意が、彼女にはありがたかった。

まちは久しぶりに和服姿で出かけることにした。会食の相手が茶道の師匠ということもあるが、年末のあわただしい時なればこそ、しっかりとした着物の感触を楽しむのも、彼女の張合いなのである。

田基といっしょに現れた女は、まち子が考えていたよりはずつと若い人であった。額の生え際が美しく、全体に品の良い人柄をにじませていた。話してみると、そういう仕事の人にありがちな感謝が、まるで身についていないことが感じとれた。まちは、田基の人選を感謝せずにはいられない。

その女が自分の茶道経歴を語るのを、まちは料理を食べながら聞き入っていたが、何となく視線をそらせた時、店に入って来た一組の男女が、強い衝撃をもって彼女の目に映った。それは和彦と涼子の二人であった。

店内は満席であったが、前もって予約してあったと見え、二人はボーイの案内でだいぶ離れた窓際の席に腰を沈めた。かれらは殆んど他所に目をやることなく、恋人同志のようにひっそりと向き合っている。

まちは軀の中を得体の知れぬ熱いものが駆けめぐるのが覚えた。彼女は目の前の女の話の半ば上の空で聞きながら、抑えようとしてもますます昂まってくる血のざわめきを愉しんでいる。一瞬、彼女の脳裏を取り澄ました佐久子の顔がよぎっていった。

人気メニュー紹介

[あさり・しめじ・椎茸・納豆]をブレンドにしてスパゲティにかけたもの

材 料	産 地
あさり	有明海, 浜名湖, そして瀬戸内のものを広島にて加工
しめじ	奈良県の西吉野の山林にて作られたもの
椎 茸	四国徳島の阿南地方のもの
納 豆	地元神戸, 須磨で国産の大豆を使ったもの

[たらこ・うに・いか・いくら]をブレンドにしてスパゲティとからめたもの

材 料	産 地
たらこ	北海道釧路でスケトウダラの卵巣を加工したもの
う に	佐賀県は唐津特産のものを加工
い か	瀬戸内海でとれた紋甲イカをボイルしたもの
いくら	北海道は根室でサケの卵を加工したもの

まだまだ、これ以外に45種のスパゲティを、ご用意いたしております。

このようにしてみますと、身近なところにもまだまだおいしい味覚が眠っているのですネ。

サァ、あなたも(貴方も)私達、壁の穴スタッフと一緒に、貴方だけの、新しい味覚の旅に出かけてみませんか？

パーティ・コンパなども承っておりますので、お気軽に電話下さいませ。心よりお待ちしております。

東京・渋谷

スパゲティ専門店

Spaghetti 壁の穴

<三宮店>

中央区三宮町1-5サンロイヤル神戸10F(さんプラザ)

TEL 078-332-4551

営業時間11AM~9PM 第1・3月曜休